



ワールドトークRPG! 5

W O R L D T O K U R P G !

しろやぎ
Shiroyagi



アルファライト文庫



主な
登場人物

Main
Characters

メル

メテオの護衛を
している戦士。
無邪気な性格。

エステル

メテオの弟子で魔術師。
賢者レベルが高い。

アーティア

ウォルスタの商業神
神殿長を務める神官。
とにかく金にうるさい。

ハム

ウォルスタ自警団長。
無口な戦士で、
武器マニアの
一面もある。

ガルーダ

リトルフィートの盗賊。
いたずら好きの
トラブルメーカー。

リーズン

ウォルスタの領主。
エルフで精霊使い。
炎の魔法を
こよなく愛する。

メテオ・
ブランディッシュ

本編の主人公で、超チート魔術師。
伝説のパーティ「シューティングスター流れ星」の
リーダーにしてウォルスタの
魔術師ギルドの長。

もうひと月以上も前のことになるが、俺は二十年もの間、続けていたテーブルトークRPG『アータレウ』の世界で、自分の使っていたキャラクター『メテオ・ブランドイッシュ』

——もちろん俺も。
その場所とはウルセール王国の中心、ウルセール城の王の間である。入り口から玉座まで伸びているふっかふかの赤絨毯の上で、使い込まれた装備品を点検しているのだ。

『流れ星』のメンバーたちが、装備を整えるのにはどうなんだという場所で、それぞれ自分の持ち物を確認している。

いた。

「また、このメンバーで地下迷宮に潜れる日が来ようとはな」
炎の精霊を好む異端エルフであるリーズンが、声を弾ませながら念入りに装備を整えていた。

1 『流れ星』の再結成

アータレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランドイッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV

スキル名

17

魔術師

3

賢者

10

精霊使い

10

神官

10

盗賊

1

ゲームマスター

経験点

771,660

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の革袋
- ・魔術師の杖
(魔法の発動体)
- ・リング
(魔法の発動体)

...etc

STR
36

DEX
36

AGI
34

INT
118

VIT
114

MND
518

シユ』になっていた。

きっかけは、ゲームマスターとしてずっと一緒に遊んできた石井先輩が事故で他界した
ことだ――

石井先輩の通夜を終え、かねてから先に死んだほうが処分をすると決めていたパソコン
のハードディスクを始末すると、先輩がいつも使っていたふたつの六面ダイスを形見にも
らい、家に帰った。

当然、俺は泣いた。

高校時代から二十年來の友人を失ったことはもちろんだが、もう二度と石井先輩のマス
ターでテーブルトークRPGができない。それは俺――杉村前賢だけでなく、御影――ガ
ルーダ、聡――アーティア、総司――ハム、ミーちゃん――リーズン、そして不定期参加
だったもののマリアにとっても同じだ。

これまでみんなで作ってきた世界が、突然崩れ落ちたようなものだ。

メインのメンバーたちは、高校を卒業してからもなんとか時間をやりくりし、月に一度
はセッションをしていた。

テーブルトークRPGプレイヤーには、いくつか引退のタイミングがある。多くの趣味



のように、進学であったり、就職であったり、結婚であったり、出産であったりする。俺たちはそのすべてを乗り越えてきた。

大学や専門学校に進学後も、集まってゲームをした。

ゲームができるよう仕事の休みを合わせた。

ミーちゃんは結婚し、セクション中に破水はすいするというアクシデントであった。

それでも、俺たちのテーブルトークRPGは止まらなかった。

しかし、ゲームマスターである石井先輩が亡くなってしまったのは、さすがに無理だ。

俺は悲しむよりも、むしろ怒った。

どうして俺たちを置いて、俺たちのキャラクターを置いて、勝手に死んだんだよ!!

今思えばひどいもんだ。友人が死んだというのに、ゲームの心配だ。

けど、石井先輩も無念だったのかもしれない——

自室で激怒していた俺は、形見のダイスを床に落としてしまった。

このときの出目は、六・六。『アヤタレウ』のシステムでは、能動的な行動が完全成功する絶対の出目。

そのダイスの姿が、俺が覚えている杉村前賢としての最後の記憶だ。

そして気がつけば、俺は『アヤタレウ』の世界にいた。

それも、公式の世界観ではない。

石井先輩と皆で二十年かけて作り上げてきた世界に、だ。

その後、石井先輩とも会うことができた。なんと、この世界の神様に転生したというのだから、どんな顔をしているのかわからなかった。

先輩のハードディスクはしっかりと破壊したのに、俺のハードディスクは無傷のままなのだ。

だが先輩の話によれば、俺とこの世界に元からいたメテオは、互いに意識を交換しているらしい。俺が転生する前からメテオはこの世界に存在していたので、そう考えないと辻褄つみみが合わないということだ。

かくして俺は、この世界で魔術師メテオの身体と力を受け継ぎ、さらに元いた世界で溜たまりまくっていた経験点のお陰で、レベルを上げまくることができた。おそらく、この世界最強の魔術師に——

俺の目的は、力を維持したままあちらの世界に帰り、なおかつ好きなようにこの世界に戻ってくることだ。少なくとも現世のハードディスクにある『My Eros』のフォルダだけでも削除したい。

すでに石井先輩は神様になってしまい、人間であった頃の人格は失われているらしい。

どうも陰で見張られている気がしないでもないが、セッション中にゲームマスターの存在を気にするのもヤボだ。ひとまず先輩の言葉を信じておこう。

ひたすら強い敵を倒し、困難なことを成し遂げれば経験点が入る。

そして、通常ならスキルは10レベルが最大なのだが、それを20レベルまで引き上げたい。今の俺は17レベルで、20レベルまで成長するには、まともに考えれば十年二十年はかかる。それでも、俺はレベルを上げまくってから、魔法の品物を作ることができる《万物創成》で、20レベルぶんの力を注ぎ込み、こちらとあちらを行き来できるアイテムを作るつもりだ。

はじめは旅行気分でこの世界を味わっていたけど、今はもうそんな気分じゃない。

ここは、ゲームじゃなくて本当の世界。

それは、魔界の門を開こうとしていたユルセル王を俺が殺したこと——思い知らされた。

人殺しという一線を、俺はゲームの中でいつ越えたのか、何人殺してきたのか覚えていない。

これからも俺は、誰かを殺してしまうことがあるかもしれない。

せめて俺が得たチートの力は、誰かを殺すのではなく、守る力として使いたい。これを言っていると、周囲から甘いつて総ツツコミが入るんだけどな。俺からすれば、こちらの世界の

人間が殺伐としすぎてるんだよ!!

今のユルセル王は、先王カザンの息子であるレオンが即位している。まだ十五歳という若さだが、少なくとも俺なんかよりもよほどしっかりしている。中身は三十路のおっさんであるこの俺よりも、だ。

先王カザンは漆黒の聖杯という、契約した者が生命あるものを殺せば殺すほど力が溜まり、それに応じた望みを叶える万能のアーティファクトで、魔界の門を開こうとしていた。こう聞くと、ただの愚王に思えるかも知だが、実際は俺が掌で踊らされた感がある。

このあたりのことは、そのうち詳しく日記にでも記録しておくか……

ともかく、俺はユルセルの危機を救ったことになっている。しかし今この国は、漆黒の聖杯で何百年も前から、人間にとつて使いやすいように土地を変えてきたツケを払わされている。

あちらこちらから魔神の眷属が湧いてくるのだ。時には上位魔神まで現れるが、そういうときは自然環境の大きな変化などがあるので、逆にわかりやすい。

ここしばらくはそれを掃討するのに、ユルセル軍も俺たちも大忙しだった。

そして、今回の魔神出現は、最後のでかい膿のようだ。

ユルセル城のたもとにあるリィハン湖から、ビルよりもでかい巨大な黒い玉座が出現

した。その玉座の前には、魔神の眷属や魔神たちが湧き出す門があり、それがわずかに開いていた。

また聞きではあるんだが、魔界の門が最初に開いたときは大変だったみたいだ。

俺たち『流れ星』はもちろん、金獅子騎士団長であるストブリことラス・バルムンク、銀輪騎士団の元団長ビショップと副団長シェイラが城下にて不在。さらに白狼騎士団長のローフルも、ビショップを連れてくる都合でユルセール城にいなかった。

そのため、リィハン湖から出てくるクロ魔神たちを相手に、飛竜を操る黒龍騎士団長ヴァリウスと神官戦士で構成される青衣騎士団長ヒュメリアが陣頭指揮を取り、宮廷魔術師に戻ったロルトじいが城壁の上から……

いや、もつと詳しく話そう。リィハン湖に玉座が出現してから俺たちが王の間で装備を整えている今まで、まる一日が経過している。

『かくかくしかじか』で前設定やあらすじをぜんぶすつ飛ばすのは、石井先輩もテーブルトークRPGでよくやっていったゲームマスターの基本スキルだが、今、俺はテーブルトークRPGの世界ではなく、現実の世界にいる。

一度、俺の知っていることや聞いたことをまとめておくのも必要だろう。

発端は、昨日までさかのぼる――

2 握手

「なんだ、あれは？」

歩哨に立っていた兵士たちが、ユルセールの城壁から望むリィハン湖の異変に気がついたのは、昼どきであった。

リィハン湖の湖水が渦巻いている。

海ではないのだから、湖面が自然にこのようなことになるとは考えられない。

「何が『なんだ』だ!! いいから宮廷魔術師のロルト様を呼んでこい!! あとの者は各所へ伝令に走れ!!」

他よりも多少装備のいい兵士が、異変に気づいた兵士の頭を殴る。

彼はおおよそひと月前、この湖で起こったことを覚えていた。

人間の身体に、蛸の触手を生やした頭を持つ魔神。ウニのように球体の中央から人間の腕を生やした魔神。そして、島ほどもある巨体の、ミミズと目玉がからまりあったような魔神が、このリィハンの湖から現れたときのことを。

「隊長。またリハン湖から、よくないものが現れるのでしょうか？」

「あんな渦の中からいいモノが現れるわけなからう……」

先ほど部下を殴った、城の警護を任されている白狼騎士団の隊長が、部下の問いに顔をしかめた。

「俺は、一ヶ月前にあった魔神の出現を、ここで見ています。あのときは何の前触れもなく、湖のあちこちから異形の怪物どもが現れ、この城にまとわりついてきた。各軍団と、『流れ星』と呼ばれる凄腕の冒険者たちの助力もあり、あやつらを退けることができたが……」

どう考えても凶兆としか思えないこの現象に、なんとか救いを見つけようとするかのように、隊長は城壁から身を乗り出してリハン湖の中央にできた巨大な渦を睨みつけた。

「湖から黒い……なんだ、あれは——」

兵士の一人が、さっき「何が「なんだ」だ！」って殴りましたよね、とてもいいかげん顔を一瞬見せた。だが、隊長相手にツッコミを入れることもできず、さらにいうなら湖の状況がそれどころではなくなっていた。

渦の中から、炭よりもなお黒い、光を吸い込んでいるのではないかという物体が、持ち上がった。

城壁の上からそれを目撃した兵士たちは、その異様な光景に声も出ず、あんぐりと口を開けて眺めることしかできずにいる。

湖から出てきたものは、真っ黒い、ユルセルの城ほどもある椅子だった。

ただの黒い大きな椅子ではない。

人間をそのまま大きくしたものが座すにしては、あちこちが歪んでいた。

不釣り合いに大きな肘かけ。そり返り、膨らんだ背もたれ。ひとつひとつのパーツを見たとき、それが椅子だとわかるものは少ないだろう。

しかし全体を見ると、何者かが座するための椅子にしか見えないのだ。それどころか、これがただの椅子ではなく、玉座であることを本能的に悟る。

ここに座る者が現れたら、この世はどうにかなってしまふ。

世界が、この王に征服されるだろう。

誰が口にするでもなく、皆が感じていた。

（——何者であろうと、この玉座に座らせてはならない）

隊長がいち早く我に返った。

というのも、あまりに非現実的な玉座の土台が、人工の石畳のようなものでできていたからだ。

そこには、まだいくばくかの現実を感じることができたのである。

「――総員。ありったけの弓矢を持ってこい」

「はっ！」

隊長が鋭く指示を出すと、部下たちも我に返り、一斉に動き出した。

「武器庫に行つて、飛び道具をすべてだ。見張りも伝令もすべて向かえ!!」

城壁から、見張りも伝令も残らず動かし、武器庫に向かわせる。本来ならばありえない指示だった。

ひよつとすると、隊長はこのとき冷静ではなかったのかもしれない。

だがその指示は、結果的にこの場で起きる被害を最小限にした。

「よくないことが起こる……首都ウルセールの膝元でこれほど不吉なものが……」

不吉の象徴であるかのような玉座に目を向けたそのとき――

隊長が石畳だと思っていたものが、やにわに動き出した。

それは、石のような色をした腕だった。

「う、腕……だど?」

隊長は視力のよさを見込まれ、城壁を守る隊長となった。

彼の平均を上回る視力が、見たくないものを、いや見てはいけないものを脳に伝えてし

まった。

石畳は、人間よりもはるかに大きな腕だった。

その大きさにもかかわらず、しなやかで優美な曲線は、女性の腕を連想させた。

しかし、腕には肘というものがなく、肘があるべき場所からは手首が、掌が、指が生えていた。左手と右手の両端からなる棒状のものを、はたして腕といってよければだが。

「あ、あ……」

隊長の鋭い目は見ていた。

何千、何万もの腕が這いずり回り、手と手が握るべきものを探して蠢いているさまを。

灰色をした大きな女の腕が手と手を取り合い、みるみるリッハン湖中央からウルセールの湖畔こはんに向けて、おぞましい橋を作っている光景を。

握手とは、人と人が信頼しあつて行われるべき行為。

腕だけが独立した奇怪なものが、がつちりと固い握手をするたびに、黒い玉座の下に広がる腕の集合体は、ウルセール城へと近づいてくる。

隊長は決して豪胆な男ではなかった。かといつて臆病でもなく、一国の城壁を見張る者として必要な胆力たんりよくを備え、独特のユーモアセンスで部下からの信頼も厚かった。

「これは……こんな、こんな歪んだ握手が……」

もはや自分が何を口走ってるのかも曖昧なのだろう。熱病にかかったように全身を震わせ、口を極限まで開き、涎が流れるに任せている。

ただ目だけが、視線を外すことを禁じられたかのごとく、ウルセール城へ腕の架け橋ができるのを凝視している。

この世ならざる光景を見たくない。

しかし、目を背けることができない。

「ははは……あははは。はははははははははは！！！！」

そんな、理性的な考えがあったのかどうか、知ることはもうできない。

かつて『ウルセールの鷹の目』と呼ばれた白狼騎士、ウルセール城壁防衛隊長は、哄笑して自らが守り続けてきた城壁から身を投げた。

笑い声が、何かの潰れる音で途絶えたとき。

架け橋がウルセール城に届いた。

3 白黒青

「ロルト様！こちらです!!」

「隊長!! ロルト様をお呼びしました！隊長!」

ウルセール城壁防衛隊が宮廷魔術師ロルトを連れて戻ってきたとき、そこに隊長の姿はなかった。

「皆の者、落ち着くのじゃ」

ロルトは、白髪に白のローブ、流木のような杖を持った老人だが、その声には不思議と人を落ち着かせるものがあった。

「しかし、隊長の姿が」

「おぬしらの隊長の姿が見えぬには、それなりの理由があると思わぬか？ 儂にはそう思えるのじゃが」

この一言で、ざわめくウルセール城壁防衛隊を静かにさせた。

「隊長がなぜここにおらぬかは存ぜぬが、この場所は城とリィハン湖をつなぐ、裏門の護

りの要。^{かため}どれ、隊長が戻るまで僕^{わし}がその任に就^つかせてもらおう」

意外なことを口にした宮廷魔術師に、隊員はしばし呆然^{まぼろん}とする。

隊長がいらない以上、確かにこの場を取り仕切る者がいなくてはならない。

ただでさえ実戦経験が少ないユルセルにとって、指揮官がひとり抜けることは大きな混乱をもたらす。

そして確かに、冒険者であるメテオには及ばないものの、常に魔物の脅威^{きようゐ}にさらされている町——ウォルスタの魔術師ギルドを取り仕切っていたロルトの胆力^{たうりき}は、団長格に引けを取らない。

「ほれ、僕の姿は白狼騎士団に向いていると思わぬかね？」

白髪と白いローブをことさらにアピールして、ロルトはおどけてみせた。

その姿を見て、こんな状況であるというのに、隊員たちの顔からは笑み^{えみ}がこぼれた。

「どれ、老い^おばれでは力不足かもしれないが、それでもそれなりの魔術師なんじゃぞ」

つかつかと城壁の通路を進むと、ロルトが立ち止まったのは、城と湖をつなぐ裏門の真上。

知る者が見ればかなり大仰^{おおきよう}な身振りと、ゆっくりとした呪文詠唱^{えいしやう}で魔法を使いはじめた。「言葉に秘められた意味を探らず、うわべの音を求める者に、いざや響け^かまことの鐘^{かね}。波

紋^{もん}となりて広がり、そして返り給え^{たま}。これよりは目でもなければ耳でもなく、魔力で通じ

合え。《意思疎通》!!」

第八位階の魔法、《意思疎通》^{コミユニケイト}。

その効果は、半径十メートルほどの人物たちと意思疎通^{そつう}ができるというもの。ただし、言語によるものではないため、感覚的な内容に限られ、細かい相談などはできない。

「こ、これは——」

「おおまかな指示は伝わるじやろ？　しばらくは戸惑^{とまど}うかも知じやが、慣れれば便利な魔法よ」

この場にいるほぼすべての者にとって初体験の魔法であったが、しばらくすると全員が元から備わっていた感覚であるかのように、この魔法を受け入れはじめた。

細かな指示ができなくとも、大変な効果をもたらした。滑り^{すべ}の悪い扉に油をさしたかのごとく、意思が兵士たちにするすると伝わっていく。

この魔法を使い慣れているロルトからの意思発信は簡潔で、(そっちを見張れ)(武器を構えろ)といった内容だった。そしてそれに対し、部下たちは了承の念を送るだけでいい。また、ロルトが口頭で伝えたことも、部下たちはやはり念で返すだけで済む。

この《意思疎通》^{コミユニケイト}をうまく使い、ロルトは瞬^{またた}く間に、城壁にずらりと弓箭隊^{きうせんたい}を展開する

ことに成功した。隊長でもない魔法使いがこれほどの統率力を發揮できるとは……と、目端の利く隊員たちは瞠目する。

（やれやれ。年寄りにはきつい仕事だわい）

しかし、ロルトの内心はずいぶんと愚痴っぽいものだった。

（あの湖にできた黒い玉座に、あの不自然な出来具合の橋……なんじゃあの橋、腕みたいなものが密集したデザインか。悪い予感しかないわ。よほど豪胆な者か、しつかり意識を保っていないだけ見るだけでもまずい光景だのう）

老眼の入ったロルトの目は、遠くのものがよく見える。橋の構造を確認し、魔法と口頭によって、あまり玉座と橋を凝視せぬよう、という指示を飛ばす。

（確か、ここの隊長はそれなりに冗談のわかる男であつたが、戦士としての実力は十人並み。視力がよく、面倒見もよかつたが……この光景のいちばんひどいところを見て、正気を失つたのじゃろうか）

魔神の多くは、見ただけでも正気を保つのが難しい。根源的な恐怖を引き起こされるのだ。

十分な実力があればそれほど問題はないのだが、大変な恐怖を受けて、発狂する者も少なくない。

ロルトはそのことを十分に熟知していた。

それゆえに、必要以上に部下たちをリラックスさせる言動をしていたのだ。

（おのれの仕える国の宮廷魔術師の実力を、少しは知らしめておかねばな）

魔法にこれらの感情が漏れぬよう、きつちりと心の中に仕切りをつけて愚痴を吐くのも一流の魔術師であつた。

「黒龍騎士団。総員出撃!!」

「「応!!」」

ユルセール王国が誇る騎士団のひとつ、黒龍騎士団が飛竜にまたがり、次々と空へと出陣していく。

黒龍騎士団長ヴァリウスは、ユルセールには少ない叩き上げの武人で、地方の盗賊や魔物を退治することで名を上げ、ついには黒龍騎士団の団長を任されることになった傑物だった。

黒龍騎士団は飛竜にまたがり空を飛ぶという、騎士団の中でも花形といつていい存在であり、したがって希望する者、なりたがる貴族たちも多い。

しかし一方で、実力主義的なところのある騎士団だった。例えば、入団条件のひとつに

『騎乗する飛竜は自ら捕らえるべし』というものがある。

团长ヴァリウスにはこれについての武勇伝があったりする。

城壁の防御隊から一報が入ったとき、ヴァリウスは迷うことなく出撃可能なすべての飛竜を飛ばすことを決断した。

「团长。いくらなんでも全飛竜はやりすぎじゃないですか？」

いっても無駄なんでしょうけど、といわんばかりの口ぶりで、副团长のトーマスが義務的に疑問を呈した。

「一回出撃させると飛竜の機嫌が悪くなつて、しばらく使いものにならなくなるんですから。移動や偵察ならともかく、戦闘装備一式をつけて飛ばすと、本当に後で面倒なんですよ」

「そんなことは俺が一番知っている」

かつて自ら捕獲した飛竜、テンペストに鞍を載せながら、ヴァリウスはつまらなさそうにいい放った。

「じゃあせめて十頭……いえ、五頭でもいいから後話をさせましょう。いざというとき、各都市に伝令を出せるように」

「トーマス、お前の言い分はもつともだ」

ヴァリウスはそれでも飛竜の装備を整える手を止めようとしなない。

「俺もそう思う。だが、こいつがそうしろといっているんだ」

「……テンペストが、ですか？」

トーマスは黒龍騎士团长の飛竜を見た。

テンペストはどの飛竜よりも体格がよく、力も強靱で、頭がいい。かつてヴァリウスが飛竜の繁殖地で、最も立派で若いものを選んで捕獲してきたのだ。

それからというもの、ヴァリウスはテンペストを手塩にかけて育ててきた。飛竜の寿命は人間と同じくらいだが、おそらくテンペストはヴァリウスと同じような年齢だろう。

騎士団の中では、ヴァリウスについてこのように噂されている。

「团长は、飛竜と話すことができる」

実際、ヴァリウスはテンペストに限らず、飛竜たちに声をかけている。

その多くは「元氣か?」「調子はどうか?」というものだったが、ときおり飛竜がその言葉に何かしらの反応をすることがある。

すると、ヴァリウスはこういうのだ。

「おい、この飛竜の手綱がきついようだ。少し緩めてやれ」

あるいは、

「こいつ、腹の具合が悪いようだから、夕食に薬草を混ぜておけ」と、本当に会話をしているようであった。

特にテンペストとは相性がよく、空を飛んでいるときなどあきらかに雑談している。そして、ふとしたときに後ろに追従^{ついで}している部下たちのところへ、見事な手綱^{たづな}さばきで寄っ
てみせては、

「もうすぐ雨が降るらしい。早めにどこか雨宿りできる場所を探すぞ」

といったりするのだ。もちろん、その言葉は外れたことがない。

そんな団長がいつているのだ。テンペストが飛竜の鋭敏^{えいびん}な感覚で何かを察知していることを読み取って。

「わかりました。そのようにします」

「任せた」

「俺も準備を済ませたら、すぐに合流します!!」

ヴァリウスがテンペストにまたがると、飛竜もその意を察してはばたく。ほどなく一人と一匹はひとつの生き物のように、空へと舞い上がっていった。

「……これは」

風を掴んだテンペストがユルセール城の上まで上がる。リィハン湖の状況が見えたヴァ

リウスは絶句した。

昨日まではなかった黒い玉座のようなものと、それを支える土台。王城と湖をつなぐ橋。そして、玉座の前にしみのように広がりつつある黒い影の空間。

「お前はこれに——戦いを予感しているのだな？」

語りかけるヴァリウスに対して、テンペストはグルルと低いうなり声を上げた。

「青衣騎士団の皆よ。今日は皆に伝えるべきことがある」

青衣騎士団長ヒュメリア・ドナースマローは、ユルセール場内の聖堂に集まった百人ほどの騎士たちに向かって、一段高いところから呼びかけた。

「——我が信仰する忍耐と勇気の神より、啓示^{けいじ}が下った」

聖堂に集まった騎士たちがどよめいた。

通常、神々が人間に対して、たとえそれが信徒であったとしても、直接的にかかわりを持つことはない。そもそも、神々と人間の間には超えがたい意識の差があり、会話するのは不可能だ。

しかし、神が見過^{けいじ}ごすことのできないことが起ころうとしているとき、神は神官に短い啓示^{けいじ}を示すことがある。

もちろん、それにふさわしい立場があり、能力に信頼のおけるヒュメリアであればこそ啓示である。市井ではいつもどこかで誰かが、神の啓示を受けたと吹聴して、人心を乱している。たとえ神官であっても、おいそれと啓示の内容を人に伝えるのは憚られるものだ。

「その啓示とは――」

老獪なヒュメリアのこと。自分の言葉が団員たちにどのような感情や効果をもたらすかを知悉している。

たつぷりと言葉を溜め、他の者が見れば少々長すぎる沈黙を聖堂のすみずみに行き渡らせた。

誰かの唾を呑む音すらない沈黙の中で、ヒュメリアは低く、短く、決然と宣言する。

「――忍耐不要である、と」

「忍耐……」

「……不要」

聖堂にどよめきが起こり、すぐさまひとつの唱和となっていく。

「『忍耐不要！ 忍耐不要!!』」

沈黙が、団員たちの熱狂的な歓声によって破られた。

忍耐と勇気の神はその教義を、耐え忍ぶことに重点を置いている。

いかなる苦境にも折れず屈せず、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍ぶ。

そのようなストイックさを持つ者が、神の声を聞き、神官となる。

しかし、耐えるべきではないことがこの世の中には、ごくまれに存在する。

理不尽なものについては、耐えることが時に間違いとなる。

そのようなときには、勇気を持ってこう叫べと教えている。

忍耐不要、と。

「我々の忍耐は、今ここに勇氣とともに試される!!」

聖堂の壇上からヒュメリアが絶妙のタイミングで拳を振り上げる。

「武器の使用！ 忍耐不要!!」

「『忍耐不要!!』」

一歩間違えれば暴徒になるのではないかという青衣騎士団の熱狂を、ギリギリのところまでコントロールするヒュメリアは、普段の厳しい顔の老人とは思えなかった。

「魔法の使用！ 忍耐不要!!」

「『忍耐不要!!』」

「忍耐不要ッ!!」

「『忍耐不要ッ!!』」

忍耐不要。その言葉が、聖堂を揺るがす合唱となった。

青衣騎士団の数は、他の騎士団に比べて少ない。

団員は神聖魔法の使用が必須であるからだ。

通常は戦闘に加わることがほとんどなく、その力は護身と自軍の治療に使われる。

部隊が青衣騎士団単独で編成されることもあまりなく、おもな役目は他の騎士団の後方支援だ。

神官戦士たちの熱狂の中、自身もその熱に身を委ねながらも、ヒュメリアの頭は冷静な部分を残している。

神の啓示は嘘ではない。

通常、青衣騎士団が随伴するのは、陸上の部隊である白狼と銀輪、そして金獅子騎士団だ。黒龍は飛竜を扱う役割上、随伴することが困難だからだ。

このうち白狼と銀輪、金獅子の団長が不在である今だからこそ、神から『忍耐不要』の啓示が下ったのだろう。

青衣騎士団も武器を取り、勇気を示すべきだと。

熱情と冷静のはざま、ヒュメリアは集まった騎士団員の一人ひとりに目を向ける。

神が啓示を下すほどの何かが起ころうとしている。

このうちの何人かは、天に召されることもあるかもしれない。

それを深く認識した上で、ヒュメリアは手を上げて団員たちの熱唱を止める。

「――耐えるべきことを耐える力。そして、不条理に対しては立ち向かう勇氣。そして、何にもましてそれらを見抜く叡智を、神はわれわれに与えたもうた」

またしてもヒュメリアは言葉を切って、空を仰ぎ見る。

「これより向かうは不条理。われら青衣騎士団の青き衣は聖衣。神に、己に恥じぬ勇氣を纏い、立ち向かう! 『忍耐不要』!!」

「『忍耐不要ッ!!』」

ヒュメリアが使ったのは、忍耐と勇氣の神の固有魔法『忍耐不要』。

これより、啓示が示した忍耐不要なことが解決するまで、精神に関わる影響を無効化し、一時的に戦士としての力を底上げする神聖魔法だ。

「――神よ。この魔法を使うことに耐える力をわたくしにお与えください。そして、彼らに困難に立ち向かう勇氣をお与えください」

自分の魔法は多くを救うが、その一方で生命を失うであろう団員たちのことを考え、ヒュメリアは深く強く祈る。

4 了解

「……これはいかん。僕も書物でしか見たことがないが、魔界の門ではないか」

城壁からリィハン湖の黒い玉座の前に広がる黒いしみのような現象を見て、
《意思疎通》でうかつに感情が漏れないよう、ロルトはこっそりと呟いた。

「幸い、初動が早い。銀輪騎士団は団長副団長を失っているが、城下町にいる白狼団長
ローフル殿と金獅子のバルムンク殿が合流するまで我慢じゃな」

このときまだロルトは知らない。銀輪騎士団元団長のビショップが《精神修理》で副団
長シェイラを廃人から徐々に正常な状態に戻していたこと。だが、バルムンクはそのシェ
イラによって刺し殺され、アーティアの《復活》で蘇りはしたものの、しばらくは戦士
として使いものにならないという複雑怪奇な状況を。

黒々とした闇のような空間は、ロルトもまだ見たことがない。しかし、多くの文献に書
かれていた魔界の門の様子とはほぼ一致する。

『門』は、ごく稀に自然界でも瘴気が濃い場所では出現することがあるという。そのさいは

『門』の大きさや時間に応じた魔神が出てくるらしい。

「こりゃ大きいわい。僕も前線に出る必要があるかもしれんのか……」

黒いしみの『門』はすでにちょっとした噴水くらいまで広がっていたが、そこで広がりを止めた。

（今から出てくるもの、気持ち悪い。心を強くしろ）

これから出現するのが、多くの人間の心によくない姿形をしているであろうと予測した
ロルトは、念話で概略を伝える。

（お前たちもな）

ロルトが見上げた空には、飛竜たちが羽ばたいていた。

（了）

上空の黒龍騎士団たちから念が返ってくる。そして、珍しい意思も返ってきた。

「なんじゃと？ そうか、わかった。お前たちも気をつけるのじゃぞ」

ロルトは声を出しながら念話する。携帯電話などないこの世界では、まるでボケてしま
った老人のようだった。

「ギユアッ！」

「かわいい奴らじゃの」

「ロ、ロルト様？ 今のはもしかして飛竜と……？」

兵士のひとりがロルトの様子を窺いながら、声をかけた。

「そうじゃ。人間とは少々精神構造が違ふところを魔法で意思疎通しているから、言葉にはしづらいのじゃが……『まかせておけ』というところかのう」

ロルトはしばし考えたあと、ざっくりすぎる表現でそう告げた。

「ウルセールの頼もしい騎士たちが出てきたところで、あちらからも出てくるぞ。気をしっかり持つようにな」

魔界の門が、沸騰したかのように泡立った。

その泡は暗い虹色にてらてらと光り、黒いしみの中から溢れかえる。それが「ヒト」を模した姿になったところで、泡の半分ほどが目玉に変わった。

「バブルアイ——中程度の力を持つ魔神じゃな。黒龍騎士団は一对一なら遅れを取るまいが、問題は団長不在の白狼と銀輪騎士たちじゃな」

泡立つ姿を見て、ロルトは即座にその正体を見破った。実際に見たことはない魔神だったが、これまで目を通してきた文献の中にあった。

その強さや能力が文献通りであるとすれば、かなり事態は逼迫しているといえる。バブルアイは全身の目から、人間を恐怖させる視線を飛ばす。

精鋭揃いの黒龍と金獅子騎士団なら抵抗できるかもしれないが、本来前線の主戦力となるべき白狼と銀輪は、団長たちがいまだ不在で、戦力にもむらがある。統率する者がいないと、恐怖の視線が軍隊を壊滅させることもあるだろう。

白狼騎士団のローフルと金獅子のバルムンクは城下町におり、ほどなく戦場に到着するはず。問題は、戦場の主力ともいえる騎馬と戦車の部隊である銀輪の指揮官だ。

本当は団長、副団長がいちばんしつかりした騎士団なのだが、こちらは戦線に投入できないような状態ではない。銀輪騎士団は、指揮官不在の状態に挑まなくてはならない。「さあ困ったぞ。さすがに僕が戦車に乗り込んで指揮とかできぬしなあ……む、あれは青衣騎士団？」

裏門から一糸乱れぬ陣形で現れたのは、青い上衣を纏った騎士たちだった。本来は、他の騎士団に随伴し、回復や補給といった役目を担う青衣騎士団。騎士の名はつくものの、その力はほとんど護身のためであり、騎士の実力でいえば他の騎士団よりも一段落ちる。

「いやこれは無謀じゃ。ヒュメリア殿はやけども起こしたのか——なんと！ 僕の『意思疎通』が通じていないじゃと!? これはもしや、忍耐と勇気の高司祭が使う固有魔法『忍耐不要』!!!」

《忍耐不要》は信徒の戦士の力を上げ、精神に作用する効果のいっさいを無効化する。

もちろん、精神に直接作用するロルトの魔法すらはねのける。

「まさかヒュメリア殿が、神の代弁者となるまで極まっていようと!! 青衣騎士団すべてが魔神の恐怖をもつとせぬ屈強な盾となるのであれば、あるいは——」

持てる知識を総動員して、ロルトがこの戦いの行く末を計算する。当然、この魔神だけで終わることはないだろう。しかし、城下町には団長たちだけではなく、自分よりも遙かに魔術の高みに達しているメテオをはじめ、その仲間がいることも知っている。

今すべきことは、この城に魔神たちを近寄らせないこと。諦めかけていたロルトだったが、下から響いてくる青衣騎士団の唱和に勇気づけられた。

「『忍耐不要! 忍耐不要!!』」

「——忍耐の信徒たちが、忍耐不要と雄叫びを上げながら進軍するとは。これは敵に回せばこの上なく怖いが、味方であればじつに頼もしいのう」

青衣騎士団たちの雄叫びに、ロルトがよくわからない感想を口走る。

それほどに青衣騎士団が発するオーラは熱を帯びていて、普段の彼らとの様子の違いに、自軍の者ですらわずかながらも引いてしまうのだ。

「げに宗教とは——いや、こんなことを吠えている場合ではないな」

ロルトは、城壁の上で青衣騎士団の様子に呆然としていた白狼の騎士たちを見直し、こ

ごとばかりに一喝する。

「何をしておる! 弩砲の準備をしておけ!! よいか、あの橋に魔神どもがつめかけたら、橋を壊すくらいの気持ちで打ち込むぞ!!」

「『は、はっ!!』」

ヒュメリアが冷静さを保っているのであれば、あの得体の知れない橋に自軍を渡らせて攻めこむよりも、橋からこちらに上陸させない方を選ぶだろう。いまだ敵の正体も不明で、どれだけの戦いになるかもわからないのだ。

（しかし団長不在とはいえ、このウルセールに必要なのは指揮官たちじゃな。黒龍と青衣たちの迅速さに比べて、白狼の歩兵と銀輪の騎馬たちはいまだ出陣すらできておらぬとは……）

長く平和が続いてきたウルセールだけに、指揮官になる人材が少ない。それはロルトも、国王であるレオンにも、わかっていることではあった。

しかし、銀輪のトップたちによる不祥事——というのはやや強い表現だが、それによって指揮官の代えが利かないのは痛いほどわかった。

（ベリアス殿とシェイラ殿の後を継いで団長となった——何といったかな? そうじゃ、シユミラスという男も貴族主義まるだしの御仁であつたし、なにより魔神掃討の任務で突

出してすぐ死んでしもうた。その後釜も決まらぬうちにこのようなまあ……)

ロルトの心の愚痴は止まらなかった。

といっても、王の第一側近として宮廷魔術師となり、さまざまな改革や内政に携わる身としては、これくらいがちょうどいいのかもしれないが。

「ロ、ロルト様」

「ん、なんじゃ？」

「……その、なんと申しますか、お立場があるのは重々承知しておりますし、我々も先に戦没されたシユミラス様について、おおむね意見を同じくするものですが」

一人の兵士がそばに寄り、言いづらそうに口を開いた。

「魔法での意思疎通なので詳しいことはわかりかねますが……漏れております」

「これはしたり!!」

うっかりしたという軽い様子で、ロルトは額をビシヤリと叩いた。

「あー……なんじゃ、その、歳を取るといろいろ緩くなるもんじゃ。涙腺とか、膀胱とか、
とか」

「は、はあ」

「い、いや、下はまだまだだらしくはないぞ!? そのつまり、何じゃ、うっかりじゃ、

うっかり」

しかし年の功だろうか、ロルトは心を切り替えると、唇に指を一本当ててこう念じた。

(——今のは秘密じゃ)

すると白狼騎士団員は呆氣にとられた表情を浮かべたが、すぐににやりと笑みを浮かべ、
(了解)

と、ロルトに念を返すのだった。

5 青衣騎士団長

ロルトの予想通り、青衣騎士団は不気味な手によって形作られた橋へは進まず、その手前で陣を組みはじめた。人間の身長の数倍でもある長柄の槍を前に突き出し、こちら側に上陸させまいという気概で、みっしりと槍ぶすまを敷き詰めた。

ほどなくして、橋を渡ってぶくぶくと泡立ちながら、異形の兵が迫ってきた。

その速度は歩くほど遅くはなく、走るほど速くもない。なんとも微妙な速度であったが、なによりも進んでくる光景が、この世のものならざるものであった。

立ち読みサンプル はここまで

内側から泡立つ身体を持ち、その身体全体を目玉がぐるぐると循環^{じゅんかん}している。どこに視線があるのかもわからず、どこに向かって進んでいるのかもわからない。目のひとつひとつには意思があるのかもしれないが、これほどまでに集まり、でたらめに動く、そういったものがまったく感じられない。

通常の人間、いや鍛^{たく}えられた兵士であつたとしても、この異形の姿を目にした心の衝撃、そして魔神が放つあやしい視線の毒が、魔法のような作用を及ぼす。

端的に言えば、恐怖にかられて能動的な行動がいっさいできなくなってしまうのだ。

しかし青衣騎士団は、団長のヒュメリア・ドナースマロー——ユルセールの大神官も兼ねる人物が使った、忍耐と勇気の神の固有魔法《忍耐不要^{ペナルティレス}》の恩寵^{おんく}によって、恐怖どころか精神に作用する効果の一切を受けない。

この魔法が終わるときは、差し迫った不条理を正したとき、あるいは信徒全員が討ち死にしたときだ。

「第一陣、来ます!!」

「前衛^{ぜんゑい}!! これより迫る不条理に対して忍耐は不要! しかし、この場を凌^{しの}ぐ忍耐こそが勇氣!! 魔神どもの一片たりとてユルセールに近づけるな!!」

齡六十を超える老人とは思えないほど張りのある声をあげ、ヒュメリアは前衛に、その

場にいるすべての兵の耳に訴えかけた。

「忍耐すべきことと忍耐すべきではないこと。それを知り、超えることは、勇ある者の行いなり!!」

どう見ても儀礼用ではなく戦闘用の鎚矛^{たいぼう}を掲げて叫ぶ。

「今ここに! 忍耐不要!!」

「[[忍耐不要!!]]」

ただごとではない一体感で、橋とその左右の湖畔^{こはん}を青く染めた。

その様子は、上空を旋回^{せんかい}する黒龍騎士団ですら、魔神の異形のインパクトを忘れ、息を呑んで見つめるほどだ。

間もなく、泡の魔神たちが橋のアーチの最も高いところにたどりついた。青衣騎士団に魔神たちの容貌^{ようぼう}と視線が効果を及ぼさないと同じく、魔神たちも一丸となった青衣に怯^{ひそ}む様子はない。

——だがそのとき、先頭をいく魔神らがはじけ飛んだ。

「城壁からの弩砲^{バリスタ}か!! それにしても、われらや黒龍と同じくらいに準備が早いとは、宮廷魔術師殿は戦上手なようだ」

ヒュメリアは一度だけユルセールの城壁を振り返る。そこには、宮廷魔術師ロルトの白